



有限会社 茅ヶ崎方式英語会 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-9 第二東明ビル 2F
Tel/Fax 03-3288-2770 <http://www.chigasakieigo.com/> e-mail: info@chigasakieigo.com

英語を書く

茅ヶ崎方式英語会 代表 大美賀廣芳

謹賀新年。震災の災禍を改めてお見舞いを申し上げ、新年のご多幸をご祈念申し上げます。

震災の後、諸外国からの支援や励ましに心打たれながらも、自身は被災地へ赴くこともなく、些少の義捐金を寄付することくらいしかできず、その不甲斐無さと、なにか大きな不安の中において、松本亨先生の「書く英語」（基礎編 英友社）を始めました。

「書く英語」は英文 Writing の Bible とも呼ばれる本ですのでご存知の方が多いと思いますが、例題の多い英語を書くドリルのような学習書で、例題の解答をノートに書き、模範解答とつき合わせて、答え合わせをしながら読み進めます。

取り掛かった当初は、答合わせを急いで、きれいな字が書けず、ケアレスミスの多い英文でしたが、徐々にきれいに正確に書くことが重要であることが分かり、そして、その書く行為が謂れの無い不安を消してくれることに気付き、時に、模範解答と同じ英文を作れた時は写経の功德はこのようなものかと思うにいたり、日々例題を解いてから就寝する生活習慣になり、基礎編を終えました。

英語を書いてほっとすることに味を占めて、茅ヶ崎方式の学習会の準備に、教本の和訳例から英文を書く練習を加えました。Translation（直訳）ではなく Interpretation（意識）を心がけましたが、教本の例文（ニュースの英語）は簡易な表現が多いので日常会話の英語よりも書きやすいことに気がきました。そして、書くことによって Listening 理解がしっかりと補強されることも実感しました。英語を書くことで、文の構造、基本的な文法、単語の用法をより確実に理解、把握できるようになるためと考えています。

改めて、「英語を書く」ことを英語学習に組み入れることをお勧めします。手書きが良いと思います。英語が身体に染み込ませられる感じがします。Dictation ではなく英訳です。Translation ではなく Interpretation です。英文をいくつも書いて、その模範解答例から用法を学び、自分なりの実用文法を習得していただけたらと思います。

「英語を書く」ことは、しっかりとした英語学習基盤をつくるのに役立つばかりでなく、そのまま NET 時代の International Communication の output に繋がります。

協力校紹介 第50回



《田園青葉緑校》 神奈川県横浜市

講師 杉山 美恵子

皆の記憶に深く刻まれることとなった 2011 年も、はや暮れようとしています。自然災害、金融不安、民主化運動、そして撫子ジャパンまで、LCT の題材も“今年らしさ”満載でした。世界で起きている事と同時進行で英語を学ぶ茅ヶ崎方式英語会の醍醐味を味わった一年でもありました。

今日は、私がどうして茅ヶ崎方式英語会の講師となったか。茅ヶ崎方式の優れた独自性を何処に見たか。その辺りのことを感じるままにお話させていただくことに致します。

英文科卒業以来、県立高校で二年教鞭をとった後、女性の社会進出の困難な時代を主婦として暮らしておりました。すぐに飽き足りない気持ちに襲われ、自宅の一室を開放して近隣の中学生、高校生を教え始めました。長らくそうしていましたが、常に物足りなさを感じていました。もう少し何とかならないか、もう少し専門的な道を進めないだろうか。予備校の講師にも、院卒や海外の大学を卒業した人が多い中、今私にできることは何だろうと。

とりあえず、英検一級を目指して取得し、電車で行ける海外の大学（メリーランド州立大）で単位をとってみたいしていました。出版翻訳の可能性を探ったこともありましたが、何かしていれば気持ちが治まっていたのです。

しかし何も変わりません。そして思い出したのが茅ヶ崎方式英語会。一級受験準備をする過程で、出会ってしまっていたのです。「これだわ」と思ったら、既に私はネットで講師募集を探していました。そして受け入れられた田園青葉校。ここで共同経営者の一人、鈴木玲子氏と 30 年ぶりの再会を果たすことになりました。茅ヶ崎方式は別々の道を歩いた二人を 30 年後に会わせてくれたのです。

なぜ「これだわ」と思ったのか。実は私はもうすぐ 66 歳です。最後の仕事になると思いました。有名大学に何人入れたとか、TOEIC、TOEFL で短期間に何点上げたとか、聞くだけで英語上達が望めると喧伝するなどといった教育産業に手を貸したくはない。そうではなく、いい教本と音声の併用で継続的に学習しているうちに、気がつけば点数も上がっていたというような、本物の英語教育に携わりたいと。それを見つけた茅ヶ崎方式英語会で、自分の思う理想を最大限具現することができると直感したのです。

茅ヶ崎方式は知れば知るほど期待に応えるものでした。その中心は、よく編まれた教本にあります。レベルごとによく整理された単語・熟語群を短い例文で紹介する。それも適切な間隔をもって何度も繰り返して。音声を併用で、それこそ自然に語彙が増加するようにも仕組まれている。達成度の高い学習者にとって、目的に合う教本は中々得難いものです。実は、茅ヶ崎方式がそのニーズに答えるのです。その上、毎回配信される聴覚教材も時宜を得て、大人の生徒の好奇心を刺激します。私は教室に来る度に気力が横溢してくるのを感じます。

まだ存在を知らず「茅ヶ崎方式って？」と尋ねる英語学習者に、私は「本気で勉強していれば必ず出会う学習法です。まだ出会っていませんか？」などと先ずは前置きする。生徒となる可能性を含んだ世代を取り巻く社会環境は厳しい。だからこそ、本物である茅ヶ崎方式は生き残る。生徒の本気を受け止め、その能力を伸ばせる茅ヶ崎方式だから。Global Communication を標榜する茅ヶ崎方式は今こそ評価される時です。

私自身は本部と直接の関わりは全く持ちませんが、毎週の教材配信を通じて本部と協力校、或いは全国の講師との良好な関係を垣間見えています。風通しのいい団体だなと感じています。その最も顕著なものが所謂“訂正”です。配信した教材に、時に訂正が入ります。必ずしも訂正しなくてもいいのではと思えるものもありますが、訂正によってより良いものになっていることは確かです。訂正個所のいくつかは講師からの指摘だと思われます。訂正を憚らないこのような本部の態度に、更なる発展の可能性を感じるの一人私だけではないと思います。芳しい風ではありませんか。

我が田園青葉校も常に前進します。生徒一人一人の学習上の躓きに配慮を欠かさず、教室として何ができるかを問う二人の経営者。将来を見つめる揺るぎない視線に励まされ、誇りをもって働ける職場環境。こういった雰囲気が生徒の信頼を生んでいます。例えば、新たな Course の研究に余念のない講師がいる。適度な距離を保ちながらも教室を愛する生徒がいる。

昨今の閉塞感を伴う経済下、何業の経営も容易ではないでしょう。英会話教室の看板も随分少なくなつたように思います。こういう時こそ、本物が力を発揮する時です。好景気の時代には華やかな宣伝合戦に隠れがちで、茅ヶ崎は“知る人ぞ知る”存在でした。今も“知る人ぞ知る”存在に変わりはありません。願わくば、その“知る人”の数が増えてきますように。

長々と拙文を連ねました。ご一読を感謝いたします。最後に茅ヶ崎方式の発展を祈りつつ筆を置きます。

(2011年12月)

Jmail from the UK

Junko Fuse

英国/ロンドン グリニッジ在住

2011年5月、ナショナル・ギャラリー(National Gallery)と並び英国を代表する美術館テイト・ブリテン(Tate Britain, 旧 Tate Gallery)へ特別展‘Water Colour’を見に行く。特定の画家のものではなく、同じテーマの下、画家も作品の描かれた年代もさまざまなものを見ることができるこの手の展覧会も、好みに応じて足を運ぶようにしている。今回も17世紀から20世紀に亘る色々な作品を見ることができた。

その中でも抜きん出て見えたのがターナー(TURNER, Joseph Mallord William <1775-1851>)の作品である。彼の作品だからよく見えたのではない。「これはいい!誰の作品だろう」と思って見るとターナーなのである。個人的にターナーの絵は初期の水彩画の方が晩年の油彩画よりも好きである。自分の中にその作風がインプットされ、知っている作品でなくてもその絵を見た瞬間に引き寄せられる感覚がある。

展示物の中にターナーが愛用した絵筆とパレットがあった。これはとても興味深いもので、しばらくずっとガラスケースの中に入ったそれらの品に見入っていた。それはまたあることを思い出させてくれるものでもあった。

1996年6月、滞在していたイングランド南西部ドーセット州にある私立学校(independent school)での活動も終りに近づいていた。年度末にあたるこの時期に学校関係者が一堂に会して晩餐会が行われたが、有難いことに私もそこに招待してもらった。私のテーブルには教務主任(Director of Study)の先生をはじめ、校長・副校長を除く学校の要職につく先生方が同席しており緊張したが、言語科主任(Head of Language)で私の世話係(?)のヘンリー(Henry)夫妻もいてくれたので心強かった。

食事も終りに近づいた頃、ヘンリーが「後ろを振り向かず聞いてくれる?」と話しかけてきた。誰かが後方にいるらしい。「後ろに舞台があるだろう?そこで食事をしている人の中にR・コンスタブル氏がいるんだよ。」え?コンスタブル?「ジョン・コンスタブル(CONSTABLE, John <1776-1837>: 詳しくは前回のJmailを参照されたし)の子孫(great-great-great grandson)だよ。」まさか!また人からかうのが好きなヘンリーが冗談を言っているのだと思い笑ったが、彼は真顔で続ける。「僕のクラスにSという女子生徒がいるのは知っているね。彼女の名字はコンスタブル。R氏の娘だよ。」知らなかった。「黙っていて悪かったね。でも、コンスタブルが好きな君にこの話をしたら合わせてくれとか言ってくるんじゃないかと思ってね…R氏は自分がコンスタブルの子孫だというだけで近づいてくる人たちにうんざりしているんで、君がどういう人かわからないうちは黙っていた。でもイースターに一人でコンスタブルの故郷に行った話を聞いて、これは本物だと思ったし、今は君がどういう人かもわかったからこの話をするよ。」ヘンリーは正直で賢明な人だ。尊敬する友人の一人である。「後でR氏が娘のことについて話しかけてくると思うから、そのとき君のことを話してみようと思う。でも、何も期待しないでほしい。」私は答えた。「ありがとう。その話をしてくれただけで十分だから。」そしてその後は他の話題に移り、時間の経過とともにそのことについては忘れてしまっていた。

しばらくして、名前を呼ばれてふりむくとヘンリーが立っている。その横に男性の姿。60代ぐらいであろうか。ヘンリーが紹介する。「こちら、R・コンスタブル氏。」名前を聞いた途端、反射的に立ち上がってしまった。「座って。僕は国王(King)じゃないよ。」と笑うR氏。私にとっては国王以上に意味のある人なのだが…とにかく座る。「君はジョンのことが好きだそうだね。」とR氏。「はい、大好きです。」私はloveという動詞を使った。R氏がほほ笑んで聞く。「ジョンの絵のどこに魅かれるのかな?彼の絵はおもしろくないという人もいるけど。」私は答えた。「この国に住んでいる人はそう言うかもしれません。なぜなら自分のまわりに彼の絵と同じ風景があるからです。日本では身の回りの緑がどんどん失われています。初めてイングランドを訪問した時、その田園風景の美しさに打たれました。とにかく緑の多さに感動しました。その後日本に帰って、展覧会でジョンの絵を見たときにそのときの感動が甦って、それからずっと彼の絵を愛し続けています。イングランドを訪問していたからこそ彼の絵を素晴らしいと思えたのだと思います。」「そう。ところで君はEast Bergholt (コンスタブルの故郷。この地を訪問した時のエピソードも前回のJmailを参照されたし)に行ったそうじゃ

ないか。車を持ってるの?」「いいえ。電車とバスを使って行きました。」「大変だったんじゃない?」「ええ。でも、色々な人に親切にしてもらって、それほど大変ではありませんでした。」「ふうん…僕はもうしばらく行ってないけど、どうだった?」「絵のままの景色でした!絵と同じ場所で写真を撮って…」その後しばらくそこで何をしたか、何を感じたかを話した。今思うと、これは「面接」だったのではないかという気がする。会話が一段落したところで R 氏が言った。「本当にジョンが好きなんだね。僕の家には彼の残した絵がいくつかあるから見に来ない?」信じられないような申し出に言葉を失っていると、横からヘンリーが「日をアレンジしようか。」かくして R 氏の自宅を訪問する段取りができあがったのである。

R 氏の自宅は豪邸というわけではなく、さりとして小さい家でもなく、静かな住宅街にある藤の花に彩られた素敵な家だった。客間には、コンスタブルはこんな大きいキャンパスにも絵を描いたのかと驚いたくらい大きな絵が飾られていた。コンスタブルの話をしていくつかしたところで「いいものを見せてあげる」と言って出してきた物を見て私は息をのんだ。それはコンスタブルが使った画材一式であった。パレットに残る絵具の跡、そして絵筆。じっと見つめていると、「手に取っていいんだよ」と R 氏が言う。驚いた。どこの馬の骨ともわからない外国人が素手でコンスタブルの筆を持っているの?指紋がついてしまうよ、と躊躇する。R 氏が言う。「僕は誰にでもこれを見せたり触らせたりはしないよ。君のように心からジョンを愛する人だけに見てもらおう。ジョンも喜ぶよ。」この言葉に心が動いた。同行してきたヘンリーも「持たせてもらえばいいじゃないか」と促す。それでは…と筆を手取る。目の前に Flatford Mill の景色が浮かぶ。コンスタブルが握った絵筆を今自分が握っている。本来なら博物館行きだ、この品は。触ることなんてできない物だ。それが今自分の手の中にある。涙が出そうになった。'Breathe!'と言うヘンリーの言葉に、皆が笑った。どうやら呼吸が止まっていたようである。

しばらく筆を握りしめたままだったが、我にかえって戻すことにした。R 氏が奥さんに「あれも出してきて」と言っている。「あれ」とは何だろう。奥さんが出してきたものを見てさらに驚いた。結婚指輪である。しかも、それはコンスタブルのものではなく妻のマライア(Maria)のものだという。そしてまたここでも信じられないことを言われた。「はめてみて。」絵筆のとき以上に私は躊躇した。コンスタブルがどれほど愛妻家だったかは多くの文献から明らかであり、妻に先立たれてから彼の作風が変わることが何よりもそれを物語っている。実は私がコンスタブルを愛する理由の一つにはそれもある。マライアの指輪を他の人の指にはめることはきっとコンスタブルが嫌がるに違いない、そう思ったのだ。「僕たちもみんなトライしたんだ。さあ、遠慮しないで」と R 氏は言うが、私はコンスタブル家の人間ではない。あまりに強く勧められるので、しぶしぶ右手の薬指にはめようとする、日本ではどうか知らないけど、この国では結婚指輪は左手の薬指にするんだよ」とわざわざ教えてくれた。どうやら逃れられないらしい。思い切って左手の薬指にはめてみる。「おお〜っ!」と声上がる。私自身も驚いた。あつらえのようにフィットしたのである。「これはすごい。うちの人間はみな指が太くて入らないんだけど、君はきれいに入ったね。」歓声がすごかったせいか、二階にいた娘の S が下りてきた。「どうしたの?」「いや、ここにマライアの指輪をすることができた人がいるんだよ。」「すごい!母も私もだめだったのよ。」と S。その後、どう見ても私より細身のヘンリーの奥さんも試したが入らない。R 氏が言う。「君は生まれ変わり(reincarnation)を信じてる?僕は今まで信じたことはなかった。くだらない考えだと思っていたよ。でも今日考えが変わった。君はマライアの生まれ変わりだと思う。」

ふと気がつくときターナーの画材が目前にあった。そう、普通はこうしてケースの中に入れてしまうものなのだ。そう考えると私が経験したことは奇跡に近い。もしかしたら評論家でも見たことがないかもしれないスケッチなども惜しまず見せてくれ、帰るときは家の外まで見送りに出してくれた R 氏夫妻、そのきっかけをつくってくれたヘンリー、そして目に見えない大きなめぐりあわせに今でも心から感謝している。

私が 20 代の頃、母が言ったことがある。お金や宝石は盗まれてしまったら終わりだけれど、教養や経験は誰にも奪えない、だからたくさん身につけるようにと。イギリスに来て経験したコンスタブルにまつわるエピソードは、自分自身の中にあるいくつかの心の宝石の中でもひととき強い光を放っている。この輝きは私の生ある限り衰えることがないだろう。